2020 年度　関西学院初等部　学校評価を終えて

関西学院では、2008 年度に初等部が開校して以来、初等部・中学部・高等部が共同し、一貫性のとれた学校評価制度を構築し、互いに連携を取り、学校評価の実施と結果の公表に取り組んできました。

2010 年度からは、幼稚園から大学院まで連なる関西学院の強みを生かし、接続する学校園の先生方に、専門的な視点からのご意見を伺うことで第三者評価と学校関係者評価の両方の性格を併せ持つ「第三者評価／学校関係者評価」を導入しています。

2020 年度の初等部の取組は、「キリスト教主義教育」「教育課程・学習指導・学校行事」「生徒指導」「研修（資質向上の取組）」の４項目を重点として、評価項目を設定しました。

評価の実施にあたっては、各項目について児童、保護者、教員にアンケートを実施し（回収率①児童 100%、②保護者 77.3%、③教員 100%）、それぞれの立場からの回答を得ることにより客観性を確保するとともに、回答者個々の意見も重視するよう努めました。

次に、アンケートの集計結果を分析するとともに、各重点項目についての初等部の取組状況を教職員が総括し、今年度の取組に分析、評価を加え、今後の改善の具体的方策を示し、初等部の自己点検・評価としました。また、昨年度からはアンケート調査に関西学院のスクールモットー“Mastery for Service”についての質問を「学院共通項目」として、今年度は「学校のコロナ禍についての対応」についての質問を設定しました。さらに、それらについて接続する学校園関係者の関西学院・中学部長、教育学部准教授の専門的視点に基づくご意見を「第三者評価／学校関係者評価」とし、合わせて初等部の学校評価としてまとめました。

2020 年度は誰もが予測しなかった新型コロナウイルス感染症の影響で、教育課程をはじめ、学校運営そのものが大きな変更を余儀なくされることとなりました。しかし、各アンケート及び学校関係者評価の結果等から、初等部が開校以来大切に培ってきた教育の本質を 2020 年度も継続することができたものと感じています。

本日、学院総合企画会議（短大・各学校内部質保証部会）（2021 年３月 19 日）において、初等部の学校評価が協議・承認されました。

初等部は関西学院がめざす世界市民の育成にむけた全人教育の土台を培う大切な役割を担っていることをしっかりと自覚し、子どもたちが生涯にわたって“Mastery for Service”の体現をめざしていけるよう、教員の力量を高め、保護者の理解と協力を得て、より質の高い教育活動を展開しなければなりません。

関西学院初等部として、本学校評価を真摯にとらえ、教職員一人一人が自らの課題を探り、組織としてその課題解決に向かって取組を進め、今後もさらなる改革を図ります。

2020 年度初等部の学校評価を項目別に次頁以降に記し、ホームページ上で公表することにより、社会的信頼を高めるよう努めたいと考えています。

2021 年３月 19 日
関西学院初等部
校長　田近　敏之

学校評価

教育理念・使命・目標

【教育理念・使命】
キリスト教主義教育に基づく全人教育の「はじめの一歩」を担う。
【目標】
キリスト教主義教育を土台とした「建学の精神」を体得し、スクールモットーである“Mastery for Service”の実現をめざし、知性・情操・意志を備えた児童を育てる。
【初等部聖句】
「幼子はたくましく育ち、知恵に満ち、神の恵みに包まれていた」
［意志］　［知性］　［情操］

2020 年度の評価項目

・キリスト教主義教育
初等部の教育の根幹をなすものであるため、評価項目として設定した。
・教育課程・学習指導・学校行事
教育理念にふさわしいカリキュラムを編成するために、この項目を設定した。
・生徒指導
児童が安心して生活できる学校づくりをめざしているので、この項目を設定した。
・研修（資質向上の取組）
より質の高い授業の実現を図るため、毎年の評価項目としている。

2020 年度の評価項目とテーマ、自己評価、目標、具体的な取組の状況とその効果に対する評価、今後の方策

評価項目 【テーマ】	キリスト教主義教育 【キリスト教主義に基づく、たくましい生き方の育成】	自己評価	A
目標	建学の精神に基づき、キリスト教主義教育を初等部のあらゆる教育活動の中で展開し、児童がキリスト教の精神やスクールモットー“Mastery for Service”の精神を体得できるようにする。そのためにすべての教員、また保護者がその精神について共通理解をもち児童に向き合えるようにする。		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	（具体的な取組の状況） ・今年度はコロナ禍の中、様々な活動が制約を受けた。中止とせざるを得ない行事もあったが、毎日の朝の礼拝（休校期間中は YouTube によるオンライン配信）、全学年週１時間の聖書科授業、特別礼拝、各宗教行事を土台にして、児童・保護者・教職員が建学の精神、スクールモットー“Mastery for Service”を共有し、様々な教育活動の中でキリスト教主義教育を展開してきた。 ・保護者に対しては全学年保護者対象の「聖書講座」は中止とせざるを得なかったが、ＰＴＡ活動との連携による「聖書と讃美歌に親しむ会」（各学年ごとに年１回開催）をオンラインで実施し、キリスト教主義教育の理念を共有する機会を設けた。また休校期間中の YouTube によるオンライン礼拝には、多くの保護者が参加してくださった。 ・教職員に対しては「キリスト教研修会」を実施し、具体的な聖書の学びを通して、キリスト教の考え方や価値観を共有し、キリスト教主義教育の担い手として、どのように子どもたちと関わっていくべきかを考える機会をもっている。		

	（取組の効果に対する評価） ・児童アンケート問４「こころの時間や聖書の時間は、あなたにとって大切な時間だと思いますか。」に対する肯定的な回答は 94.2％であった。今年度は全員がチャペルに入堂して礼拝を守ることはできなかったが、教室でも放送礼拝を大切に守ることができ、この結果からも礼拝や聖書を大切にする心が育っていること、そして児童の中にキリスト教主義教育が深く浸透してきていることが分かる。 ・児童アンケート問５「“Mastery for Service ”　（マスタリー・フォア・サービス）を大切にすることを心がけて生活していますか。」に対する肯定的な回答は 88.1％であった。前年よりも３ポイント低い数値であった。コロナ禍の中、他者との関わり方が変化した影響も考えられるが、このような状況の中にあってこそ、すべての子どもたちが“Mastery for Service”の精神を体現しようと思えるように、日々の教育活動の中で“Mastery for Service”の意味や大切さを伝え続けていく工夫をしていく必要がある。 ・保護者アンケート問５「学校は、キリスト教主義教育の理念について、保護者と共有する機会を設けている。」に対しては肯定的な回答の割合が 93.7％と前年よりも 5.3 ポイント低い数値であった。学年ごと開催の「聖書と讃美歌に親しむ会」はオンラインで実施できたが、全学年対象の「聖書講座」は中止とせざるを得なかったことも原因と考えられる。 ・保護者アンケート問６「学校は、キリスト教主義に基づき、人を思いやる気持ちや態度を育てている。」との質問に対しても、肯定的な回答の割合が 90.5％と高い数値を示している。 ・保護者アンケート問 20「私は、関西学院のスクールモットーが“Mastery for Service”であることを知っている。」、保護者アンケート問 21「私は、関西学院のスクールモットー“Mastery for Service”に共感している。」、保護者アンケート問 22「学校は、「“Mastery for Service”を体現する世界市民」の育成につながる教育を実践している。」との質問に対しても、肯定的な回答の割合が、それぞれ 99.3％、99.3％、89.6％と高い数値を示している。この数値から保護者もまたスクールモットー“Mastery for Service”の精神とキリスト教主義教育の実践に理解と納得をしてくださっていることが分かる。 ・教員アンケート問１「私は、礼拝や研修を通してキリスト教教育の理念を共有している。」に対する肯定的な回答は 96.9％、続く教員アンケート問２「学校はキリスト教主義教育を学校生活の中で具体化している。」との質問に対しては肯定的な回答が 96.8％となっている。教職員がキリスト教主義教育の理念を共有し、自らがキリスト教主義教育の担い手であるという自覚をもって初等部の教育の働きを担おうとしている。
今後の方策	・関西学院の建学の精神であるキリスト教主義教育やスクールモットー“Mastery for Service”を更に教育活動の中に浸透させていくために、何よりも日々の礼拝を丁寧かつ誠実に守り続けていく。 ・コロナ禍の中にあっても、オンラインを用いるなど、活動を止めない工夫をしていく。 ・聖書科授業や様々な宗教プログラム、また各学年・クラスでの活動を児童の実態に合わせて行うことにより、“Mastery for Service”をより具体的に感じられるようにしていく。 ・ホームページ、学校だより、学年だより、学級だよりなどの媒体を通して、キリスト教主義教育の意味をより深く共有していく。

2020年度の評価項目とテーマ、自己評価、目標、具体的な取組の状況とその効果に対する評価、今後の方策

評価項目 【テーマ】	教育課程・学習指導・学校行事 【真理を探究する確かな学力の育成】	自己評価	B
目標	「キリスト教主義に基づく全人教育による人間形成」を念頭に「各教科の特性や児童の興味・関心に応じた教育課程の工夫」また、「学力の的確な把握の上の学習指導」「豊かな情操を育む芸術文化活動」を目指す。		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	（具体的な取組の状況） ・新学習指導要領の実施に伴い、新教科書をもとに、年間カリキュラムを作成した。 ・開校以来取り組んできた「ＫＧタイム」を教科学習に組み入れた。「風の時間」は国語、「力の時間」は算数に組み入れ、「光の時間」は英語と名称を変えた。それに伴い、国語、算数の授業時数を増やし、英語については３年生以上は週４時間の授業時数とした。 ・新学習指導要領の実施に伴い、通知書の評価観点の見直しと新通知書を作成した。 ・新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、学校時程の大幅な改定を行った。1単位時間を40分とし、クリーンタイムを一旦停止したり、休み時間を短縮したりすることで、子どもとって、より安全な学校環境とするように努めた。 ・新型コロナウイルス感染症の拡大により、臨時休業時においてはオンライン授業を実施した。 ・新型コロナウイルス感染症の状況に鑑みながら、学校行事の延期、中止を決定した。 ・メディア委員会を中心としたＩＣＴ教育を具体的に実施した。 ・新学習指導要領の実施に伴い、評価観点が変わることから期末テストの内容について全体で議論し修正を図った。 ・学習の相対的な到達度を把握するための実力テストを実施した。また、学力不振児童については補習を行い、学習習慣の定着と学力の向上を図った。 （取組の効果に対する評価） ・児童アンケート問７「授業は楽しいですか。」では、肯定的評価が前年度82.4%から92.8%と10ポイント以上上回っている。また、児童アンケート問６「授業では、新しいことをたくさん知ることができますか。」においても、前年度89.2%から 92.8%と肯定的評価のポイントを上げている。このように授業についてポイントを上げていることは教員各々の授業力向上の研鑽はもとより、このコロナ禍の中、オンライン授業の実施やタブレット端末を活用した新しい授業の創造や工夫によるものと考える。その効果は児童アンケート問８「授業はわかりやすいですか。」でも前年度 90.8%から 93.7%と肯定的評価を上げていることからもわかる。 ・さらに保護者アンケート問 12「学校は、楽しく分かりやすい授業にするために工夫している。」では、93.8%の肯定的評価を得、前年度よりも4ポイント上回っている。保護者においても初等部の授業について満足感が得られていることがうかがえる。一方、保護者アンケート問 10「学校は基礎的知識や技能が定着する授業を行っている。」86.2%、保護者アンケート問11「学校は基礎的知識や技能を活用する場面を取り入れた授業を行っている。」83.8%では、ともに、前年度と同程度の肯定的評価にとどまっている。決して低い評価ではないが、学力に不安のある児童をもつ保護者にとっては、身につけるべき基礎的基本的な学習内容の定着についてより望んでいるものと考えられる。補習授業での学習内容や定着度を今年度から伝えるようにしているが、その点をより改善してい		

	く必要がある。 ・保護者アンケート問７「学校は、子どもの学力を把握している。」肯定的評価 89.6%と前年度からわずかではあるがポイントを上げている。しかし、保護者アンケート問８「学校は、子どもの学力を保護者にきちんと伝えている。」では、肯定的評価 79.2%と前年度からポイントを 4.7 ポイント下げている。これについては今年度、授業参観の中止など保護者の来校制限があったため、子どもの様子を伝える機会が圧倒的に少なかったことがあることは否めない。個人懇談会はオンラインで行えたが、例年対面で通知書を見ながら学習の振り返りを説明していることと比べると、十分しきれなかったことが大きな要因であると考える。この質問事項についてはこうした事態がなくとも僅かながら毎年ポイントを下げているので、その点についてさらに考察が必要である。 ・教員アンケート問４「私は、児童の客観的な学力把握に努めている。」、教員アンケート問５「私は、評価基準により、的確な評価を行っている。」についてはともに、100%の肯定的評価となっている。今年度は新学習指導要領の本格的実施に伴い、改めて評価規準を見直すために議論を重ね、その度に適切な評価のあり方について考えてきた結果、教員が評価についてしっかりとした考えをもったことが大きいと考えている。また、具体的に通知書の評価規準の文言や期末テストの内容について教科主任を中心に議論してきたことも「的確な評価」につながっていると考える。 ・今年度は開校以来初等部教育の特色の一つとして行ってきた「ＫＧタイム」を抜本的に見直し、各教科に組み入れた。これまで積み上げてきた実践を国語、算数、英語で活かすように努めてきた。 ・英語については名称こそ変わったものの、その内容、実践はよりブラッシュアップした形で行っている。特に、「毎日英語に触れる」ということを前提に、３年生以上の英語の時間数を１時間増やした。その１時間は特に個別の学習や初等部で取り組んでいる英検などにつながるように工夫している。児童アンケート問 10「英語の時間は好きですか。」では 68.7%の肯定的評価にとどまった。前年度 71.0%からは僅かではあるがポイントを下げた。、時間数が増え、英語が苦手な児童が少し浮き彫りになったことがその原因だと考える。また、例年６年生で実施しているＣＣＴ（カナダ・コミュニケーション・ツアー）や、４，５年生で実施している留学生との交流などが中止になり、児童が得たコミュニケーションスキルを表現する場がなくなったことも一因だと考えている。来年度通常の英語教育の実践が行われることが強く望まれる。児童アンケート問 11「英語の時間の勉強はわかりやすいですか」についての肯定的評価は 76.8%であった。この質問については前年度 72.2%からポイントを上げている。単純に授業時数を増やすだけでなく、より分かる楽しい英語授業になっていることがうかがえる。 ・芸術教育について、児童アンケート問 12「音楽や図工は好きですか。」では、92.8%の肯定的評価と高い。しかし前年度の 95.0%からは若干ポイントを下げている。さらに、保護者アンケート問 14「学校は、音楽、美術（図工）、を中心とした芸術教育を通して、子どもの豊かな感性を育てている。」肯定的評価 90.1%、これについても前年度 92.4%から若干ポイントを下げた。これらの評価については感染症拡大の影響を受けて、例年実施している音楽祭が中止になったことも大きな要因になっていると考える。しかし、小規模ながら学年音楽発表会を実施したり、作品展についても感染症対策を行いながら実施したりして児童の表現の場を作ってきたことは評価したい。

今後の方策	・コロナ禍における学校行事の見通しを持った運営。 ・新学習指導要領に伴い、児童の学びをどう評価していくか。それぞれの観点をどのように見取っていくのかを議論。（各教科単元末テスト、期末テストの在り方） ・ＩＣＴ教育のさらなる充実。（オンライン授業の内容、授業方法など）

評価項目 【テーマ】	生徒指導 【児童が初等部での生活を、安全かつ安心して送ることができるような指導を行う。】	自己評価	B
目標	児童が社会の一員として責任ある態度を持ち、学校生活のきまりを守ることができるようにする。そのために、学年の発達段階に応じた自己判断を促すようにする。		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	（具体的な取組の状況） ・前年度と同様に今年度も、児童が自らの判断で学校生活のルールを守ることができるような指導を基本としつつ、コロナ禍において、必ず守るようにするきまりを増やした。 ・教師による立哨を、登校する時間帯から下校する時間帯に変更した。今年度は、登校時に比べ下校時に児童が集団になる場面が増えたため、下校時に教員の数を増やし指導に当たるようにした。 ・登下校の様子を分かりやすく伝えるためのスライドを作成し、通学路の歩き方、公共交通機関での過ごし方について共通意識をもてるようにした。 ・校長室会や教師会において、日々の生活指導案件や児童の様子や時期に合わせた生活指導の要点などを伝え、事前の指導を強化することにも重点を置くようにした。 ・避難訓練は火災（10 月）、地震（１月）の２回、様々な災害に備えて行った。本年度も昨年度同様に１月の地震避難訓練は、事前予告なしで昼休みの時間帯に実施し、不測の事態にどう対処すればよいか考えられる訓練とした。 （取組の効果に対する評価） 〈児童アンケートの結果から〉 ・生活指導の観点である「学校のきまりを守ること」について、児童アンケート問 13「学校のきまりを守って生活していますか。」に対する肯定的な回答は 86.7%（前年度 85.5%）であった。この観点に関しては前年度をわずかではあるが上回る回答を示しており、児童の意識の高まりが見られる。 ・生活指導の観点である「元気よく挨拶をすること」について、児童アンケート問 14「だれにでも元気よくあいさつしていますか。」に対する肯定的な回答は 85.4%（前年度 92.0%）であった。この項目については前年度を大きく下回っている。これは、コロナ禍において、マスクをしている中での挨拶のしづらさに加え、必要以上の声を出さない指導をしていることが、挨拶をしっかりとできなくなった要因と考える。 〈保護者アンケートの結果から〉 ・それぞれに対する同様の項目での保護者アンケート問 15「学校は、集団生活に関するルールやマナーについて、適切な指導をしている。」に対する肯定的な回答は 88.0%（前年度 88.2%）、保護者アンケート問 16「学校は、しっかりと挨拶ができるように指導している。」に対する回答は 82.4%（前年度 83.2%）であり、前年度に比べ、同等もしくはポイントを落としている。「学校のきまり」に対する児童のわずかながらの意識の高まりが、保護者には十分なものとして		

	理解されていないものと考えられ、「あいさつ」に関する事項については、児童同様保護者にも低いものとして感じられていると考える。 〈教員アンケートの結果から〉 ・教員アンケート問 12「私は、命の大切さや良好な人間関係をつくることなどについて、学校生活の中で指導している。」教員アンケート問 13「私は、児童間の人間関係を円滑にするための配慮、指導をしている。」教員アンケート問 14「私は、一人ひとりの子どもが安心して学校生活を送れるように、配慮、指導している。」の３つの質問に対して、いずれも 100%の肯定的な回答が見られた。これは、コロナ禍での命の危機感を教員が同じ意識で子どもたちに向き合えていた結果であると考える。 ・教員アンケート問 11「私は、挨拶や時間厳守など、社会生活をする上での基本的なマナーが児童に身につくよう適切に指導している。」は、否定的な回答が 3.1%あった。児童の回答と同様に、マスクをしている中での挨拶の難しさを感じている表れであり、本年度は授業と授業の間が５分間しかなく、次の授業に間に合わない場合が多く見られた結果の表れであるとも考えられる。 ・低学年には、自らの判断を任せることが難しいことは前年度から明らかであったので、細かい指導が必要であることは把握していたものの、今年度は登校が６月から始まったり、分散登校がしばらく続いたりしたため、年度当初は例年より十分な指導が１年生には行えなかった。
今後の方策	・「学校のきまりを守ること」に関しては、例年と同様に教員の意識を統一させるために、校長室会や教師会で繰り返し児童の実態を伝えつつ、事前に全員で指導ができるようなアナウンスをしていく。さらに児童の意識を高めた上で、実践できるスキルを身に付けられるように、スライド等を使いながら具体的な指導を行っていく。 ・「あいさつ」については、マスクの着用がいつまで続けられるかわからない状況を踏まえ、マスクをしていても挨拶をすることで相手に気持ちを伝えられるようにしていくことの重要性を伝えるように具体的な指導を継続的に行っていく。

評価項目 【テーマ】	研修（資質向上の取り組み） 【“Mastery for Service”の体現 ～関わり合いの質を高める～】	自己評価	B
目標	「他者と対話し共感する能力」を持ち「よりよい世界 を創造」することが我々のミッションであり、“Mastery for Service”を体現する鍵となる。初等部での教育活動が、こうした力の獲得をめざすものであることを常に確認し続け、それに応えうる教員集団としての資質向上をめざす。		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	（具体的な取組の状況） 今年度は、例年取り組んできた教員集合型の研修は控え、コロナ禍への対応に特化した研修を実施した。 ・YouTube 動画事後検討会 緊急事態宣言に伴う休校時には、全教諭が YouTube 動画で授業を配信した。初めての経験のため悩みも多く、動画の内容及び学習効果について事後検討会を行い意見交換を行った。例年「小授業」という名で行ってきた一人一公開の原則を保ちながら、学年単位で実施。検討会自体をオンラインで行い、それぞれの実践記録を提出することとした。 ・ＩＣＴ研修 対面授業が再開した際、第２波以降の臨時休業を想定し、各教員が自宅から授		

業が行える準備を整えるよう、Ｚｏｏｍおよび授業支援クラウドアプリ「ロイロノート・スクール」の研修を行った。放課後の 20 分＋α の時間を用いて内容を整理し、計画的に実施した。参加は任意。

・ＩＣＴ使用状況調査

９月からＢＹＯＤにより全児童がタブレット端末を持つようになった。それがどのように活用されているのかの状況調査を行い、今後の研修計画に活かすとともに、新たなアイデアの共有を図った。

・読書会

例年学年ごとで実施していた読書会を任意参加に変えながら、幅広い読書体験を共有する場を提供した。２か月に１冊。

（取組の効果に対する評価）

・特殊な環境下における切実感から、ＩＣＴの導入が大幅に進んだ。教員のＩＣＴ使用意識も高まり、授業のありようにも変化がみられた。

・児童アンケート問３「学校は楽しいですか。」における肯定的評価が 93.1%（前年 86.7%）に上がっているのは、数か月に渡る臨時休業の影響が考えられる。

・児童アンケート問７「授業は楽しいですか。」問８「授業はわかりやすいですか。」がそれぞれ 92.8%（前年度 82.4%）、93.7%（前年度 90.8%）と上昇していることは、悩みながら動画作成をしてきた教員の休校期間中の奮闘も加味されている。教員間のリフレクションにおいては、「10 分ほどの動画にまとめることで、授業者の教科理解の深さがより明確に炙り出され刺激を受けた」という声もあり、授業づくりの根本的な見直しが功を奏した面もあると考える。

・児童アンケート問９「授業では、自分から進んで、友だちと話し合ったり、考えたり、まとめたりしていますか。」が 84.5%（前年度 81.9%）と上昇している。コロナ禍でこれまでと同じような話し合い活動を自粛したため、「とてもそう思う」が 29.0%（前年度 34.8%）と下がっているのは理解できる。しかしトータルとして上昇している理由としては、タブレット端末の使用頻度が高まり、他者の回答を「共有」したり、プレゼンのために「まとめる」活動が増えたこと等が考えられる。

・児童アンケート問 20「困ったときに、友だちや先生に相談できますか。」が 65.7%（前年度 62.1%）と微増しているがまだ低い値だと捉えられる。「まったくそう思わない」が 8.6%（前年度 13.4%）に減り、「強くそう思う」が 26.6%（前年度 22.3%）と増えていることは良い兆しといえよう。より一層安心感のある教室環境を整える為に研修を進める。

・保護者アンケート問８「学校は、子どもの学力を保護者にきちんと伝えている。」は 79.2%（前年度 83.9%）と下がっているが問７「学校は、子どもの学力を把握している。」は 89.6%（前年度 87.5%）と上がっている。問８の低評価は、授業数の少なさから１学期の通知表を出さず１・２学期をまとめた通知表を出したことと関係があるだろう。ただし、授業支援クラウドアプリ「ロイロノート・スクール」等で細やかに評価を行ってきている様子が保護者にも可視化されたため、問７における児童の学力把握への評価が高まったと考えられる。

・教員アンケート問４「私は、児童の客観的な学力把握に努めている」の「強くそう思う」が 40.6%と問５「私は、評価規準により的確な評価を行っている」の「強くそう思う」が 15.6%と大きくずれている。学力把握はできているのに的確な評価ができていないと感じる主な原因としては、新学習指導要領における評価観点「知識・技能」と「思考・表現・判断」の境目がこれまでのパラダイムと大きく異なることで、「的確に行えている」という確信が持てていないことが考えられる。

	・教員アンケート問９「学校は英語教育を通して、英語によるコミュニケーション能力を育てるとともに、基本スキルを定着させている。」の「強くそう思う」が 25.0%（前年度 17.2%）と上昇している。これは本年度から導入しているオンライン学習サービス「スタディサプリＥＮＧＬＩＳＨ」の活用状況への評価が加味されていると考えられる。
今後の方策	・タブレット端末が有効に活用される授業づくり研修を進める。 ・もしも再び臨時休業が起こる際には、的確にオンライン授業が実施できる研修を進める。 ・授業参観はしにくくとも、動画を共有しながらオンラインで事後検討会を行うなど、徐々に授業づくり研修の実施を再開する。 ・新学習指導要領における評価観点の解釈及びテスト作成や成績評価における具体化に教務委員会と共同して取り組む。

（自己評価）

A＋=テーマに対する目標を達成した。

A=テーマに対する目標を概ね達成した。

B=テーマに対する目標の達成に向けた計画や方策などを実行しているが、達成にはまだ時間がかかる。

C=テーマに対する目標の達成に向けた計画や方策などを実行していない。

総合評価

○初等部のキリスト教主義教育については、多くの児童と保護者に、聖書や礼拝を大切にしようとする意識が浸透している。教員も自らキリスト教主義教育の担い手であるという自覚をもっている。

○臨時休業時、オンライン教育を積極的に進めた。多くの児童と保護者が初等部の授業はわかりやすく楽しいと評価している。英語は本年度より新たにタブレットを活用した個別学習を取り入れた。英語学習のわかりやすさに関して児童の肯定的評価が増えてきている。

○生徒指導に関しては、コロナウイルス感染症拡大も踏まえ、児童が自らの判断でルールを守るような指導を基本としつつも必ず守るべきルールを増やした。多くの児童がそれを遵守することができた。マスク着用、大きな声を出さない指導の影響で積極的に挨拶をしない児童が増えてきている。コロナ禍の中でのコミュニケーションの取り方を具体的に指導してく必要がある。

○コロナ禍への対応としてＩＣＴ研修を推進した。教員のＩＣＴ活用意識が高まり、授業中の「共有する場面」「調べる場面」が充実した。

○コロナウイルス感染症拡大状況によりポイントが下がることが予想された児童アンケート問３「学校は楽しいですか。」保護者アンケート問４「初等部の教育には満足している。」の肯定的評価が前年度並みであった。安心・安全を最優先に考えた対応、臨時休業中の積極的なオンライン教育、日々の学級づくり、授業づくりの工夫が評価されたものと考えられる。

2020 年度の評価をふまえて 2021 年度に予定している評価項目、テーマ等

○ キリスト教主義教育
○ 教育課程・学習指導・学校行事
○ 生徒指導
○ 研修（資質向上の取組）

第三者評価／学校関係者評価

まずコロナ禍にあって、礼拝や授業のオンライン配信などを通じ、教職員一致のもと教育の営みを鋭意継続してきたことが大いに評価できます。

キリスト教主義教育については、日々の礼拝を大切にする姿勢がオンライン礼拝によって保護者にも伝わり、保護者によるスクールモットーの高い理解度の維持に資したと考えます。教職員に対する「キリスト教研修会」の実施継続を含め、今後とも、学校を挙げてのキリスト教主義教育の実

践が大いに期待されます。

教育課程・学習指導面では、休校期間の授業動画作成を教員の授業力向上の新たな機会として捉え、その「奮闘」が児童の学習へのプラス効果（楽しさや分かりやすさ）に繋がった点が大変評価できます。評価者が初等部を訪問・見学した日、タブレットと紙をハイブリッド使用する授業はスムーズに展開しており、特に、クラス全員の意見を白板で一覧し、児童の一人がその中で良いと思うものを選び、その理由を述べる場面は印象的でした。

他方、新学習指導要領の実施に伴い、この年度は、児童の学力の的確な評価に向けた過渡期にあったことが自己評価からうかがえます。初等部が大切にしている教員研修の継続などによって、学力評価のパラダイムシフトに対応することが期待されます。

生徒指導面で、社会生活上の基本的なマナーの指導が、コロナ禍により特に低学年児童に十分には行き渡らなかった点は多くの学校に共通する課題です。初等部の持つ教育力が今後その点を補っていくことを評価者は確信しています。訪問日に出会った児童の規律正しい姿がそれを示しています。

全体的に、学校の諸課題に真摯に向き合い、それらに誠実に対応する姿勢が大いに評価できます。コロナ禍を通して与えられる教育への洞察を日々の活動に活かして、今後ますます、関西学院の全人教育の「はじめの一歩」が推し進められるよう願っています。

アンケートの結果は、コロナ禍において様々な制約があったものの、全般的に良い結果でした。各項目の評価が高いことに、教職員による日々の研鑽を感じることができます。授業や休憩時間の様子を参観していると、感染症予防に配慮しつつも、どの児童の表情にも明るさや積極性を見てとることができました。キリスト教主義教育、学級経営、生徒指導、教科指導等の取り組みが充実しているのだと想起されます。

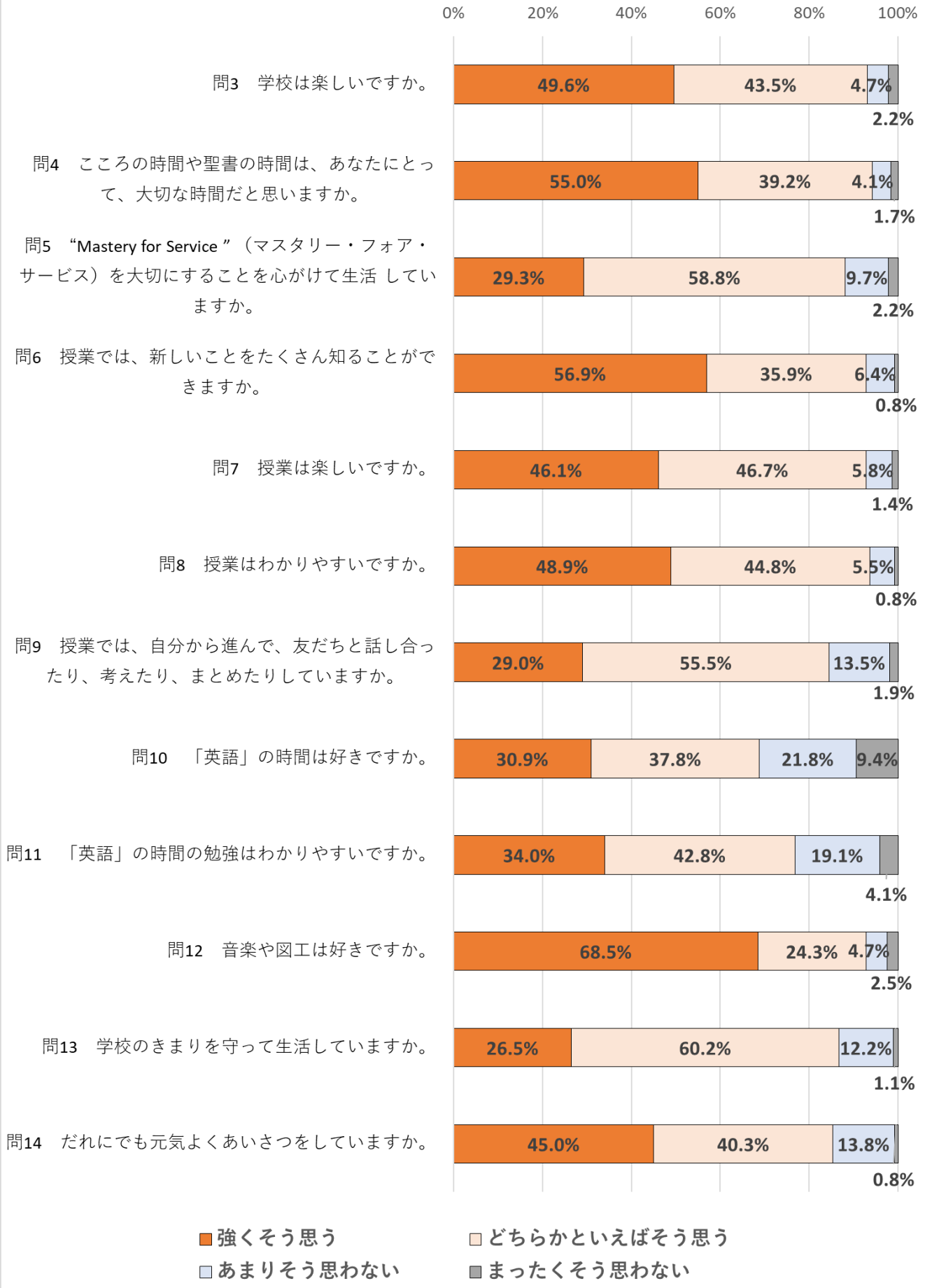
児童を対象としたアンケートでは、問３「学校は楽しいですか。」において肯定的回答が（86.7%→93.1%）、問８「授業はわかりやすいですか。」は（90.8%→93.7%）、問６「授業では、新しいことをたくさん知ることができますか」は（89.2%→92.8%）、問７「授業は楽しいですか。」は（82.4%→92.8%）という値になっており、高く評価できます。

また、同一の質問に対する否定的解答の割合を昨年度と比較した場合、問３「学校は楽しいですか。」（13.3%→6.9%）、問８「授業はわかりやすいですか。」（9.2%→6.3%）、問６「授業では、新しいことをたくさん知ることができますか」（10.8%→7.2%）、問７「授業は楽しいですか。」（17.6%→7.2%）とあり、否定的に受けとめている児童が減少していることがわかります。特に「学校は楽しいですか。」（13.3%→6.9%）と「授業は楽しいですか。」（17.6%→7.2%）において、否定的な評価の割合が１年だけで半減した事実は大変に喜ばしいことです。

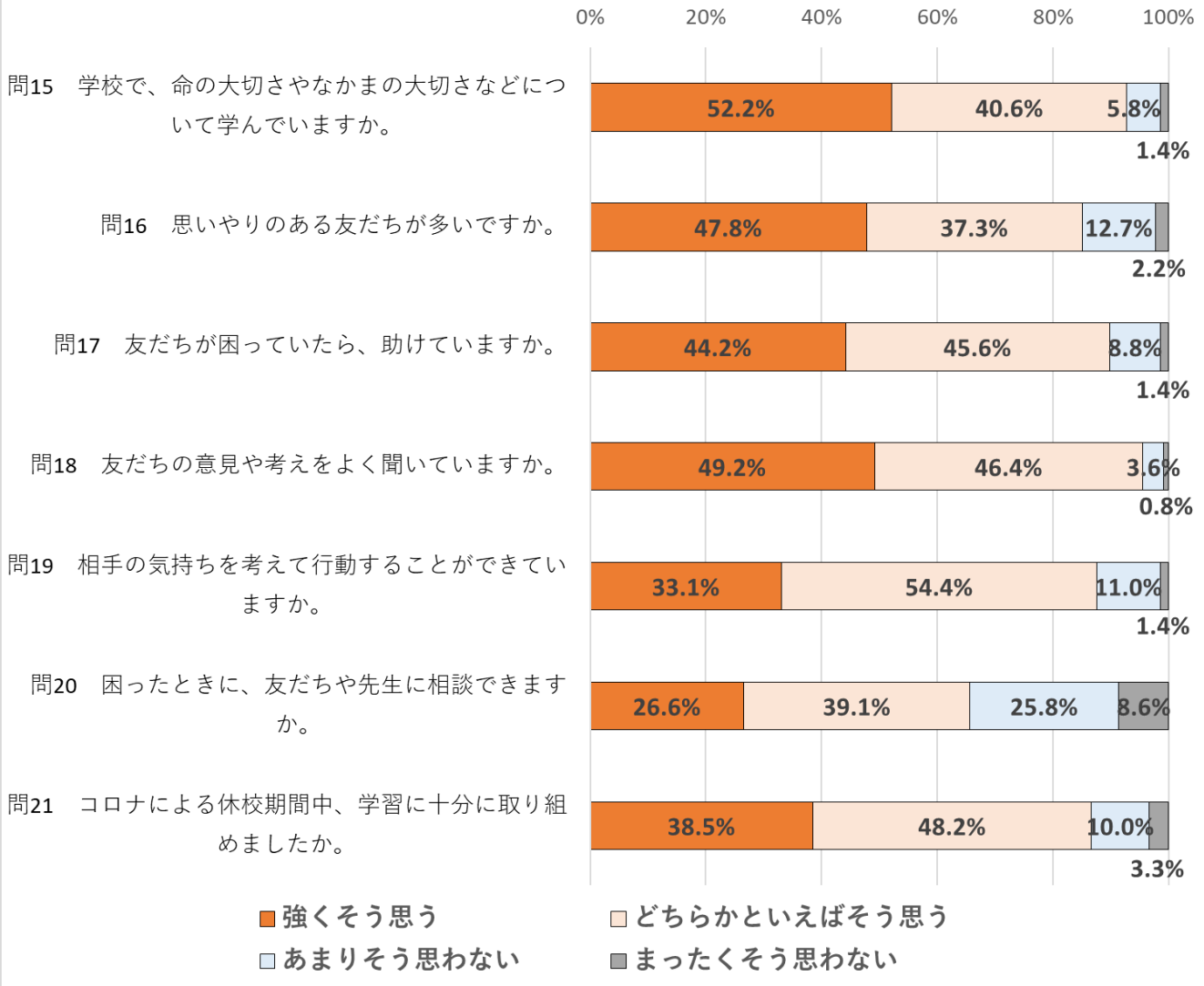
ただし、全体的になぜここまで評価が高くなったのか、昨年度との違いは何であったのか等、その要因は明確ではありません。児童にとって、学校が楽しい場であるかどうか、授業が知的に楽しいものであるかどうかは、生活の基盤に位置づきます。これまでに初等部で行われてきた「対面を軸とする学びの場」のより良い改善に向けて、今回の高い評価について児童、保護者、教員という三つの観点から継続して分析・検討する必要があります。

このことと合わせて、問20「困ったときに、友だちや先生に相談できますか」において、34.4%の児童が否定的な解答をしていることに注意する必要があります。友だちや先生に相談できる力や、友だちからの相談を受けとめる力は、「伝え合う力」としての言語力の一つでもあります。児童の３割以上が否定的な評価をしていることから、全体として「伝え合う力」としての言語力が十分に育っていない、という厳しい見方もできるでしょう。特に、コロナ禍においては「家族」というプライベート空間が生活の中心となり過ぎる傾向があり、児童にとっての相談できる場や相手が失われがちです。児童が気軽に相談できる環境づくり（組織としての学校づくり）と、児童の相談できる力や他者からの相談を受けとめる力を育てる学級経営や授業づくりのあり方を検討、実践した上で、その効果を検証する必要があります。

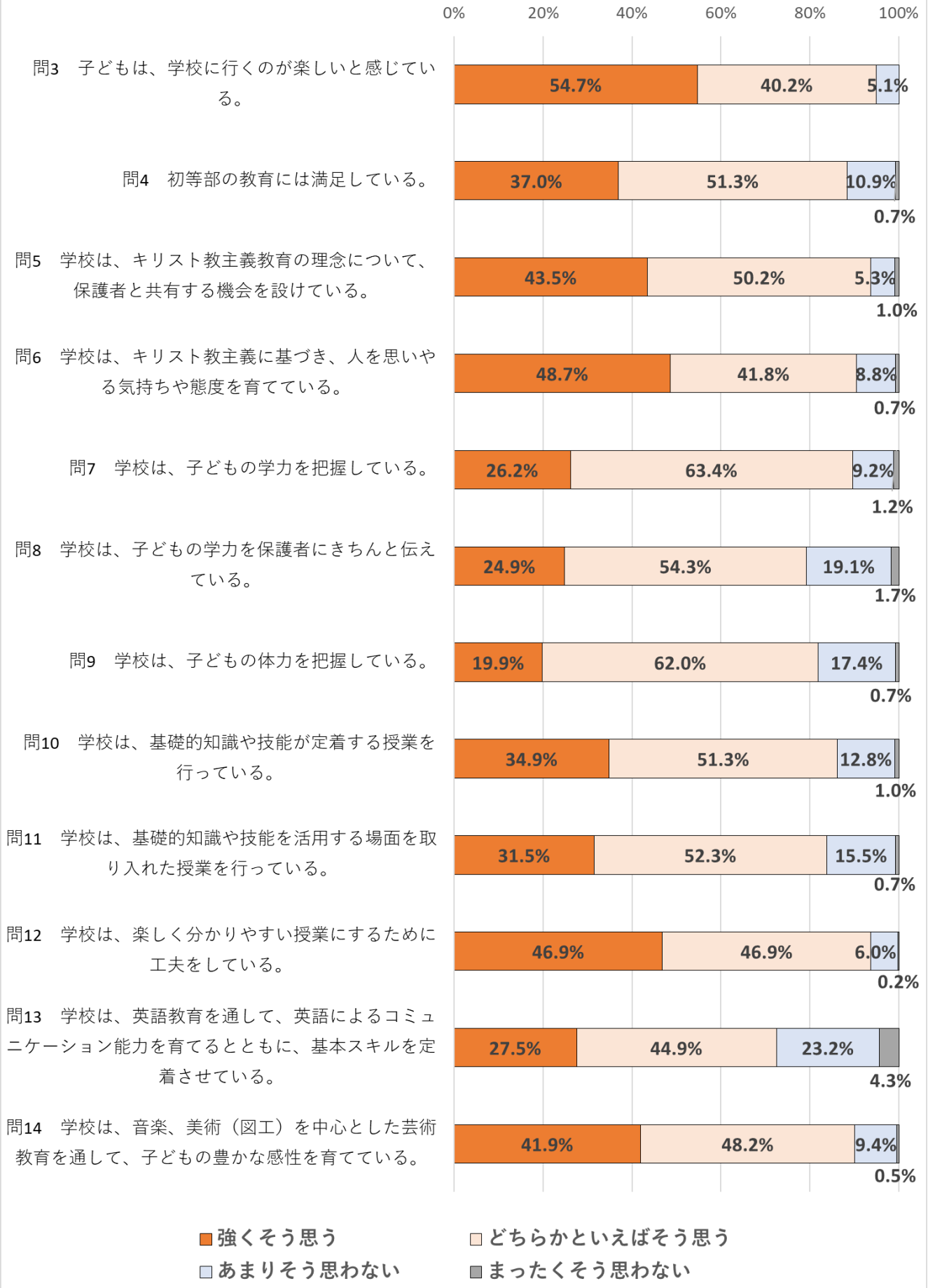
2020年度　学校評価アンケート集計結果
初等部・児童　（回収率　100％　362人/362人中）



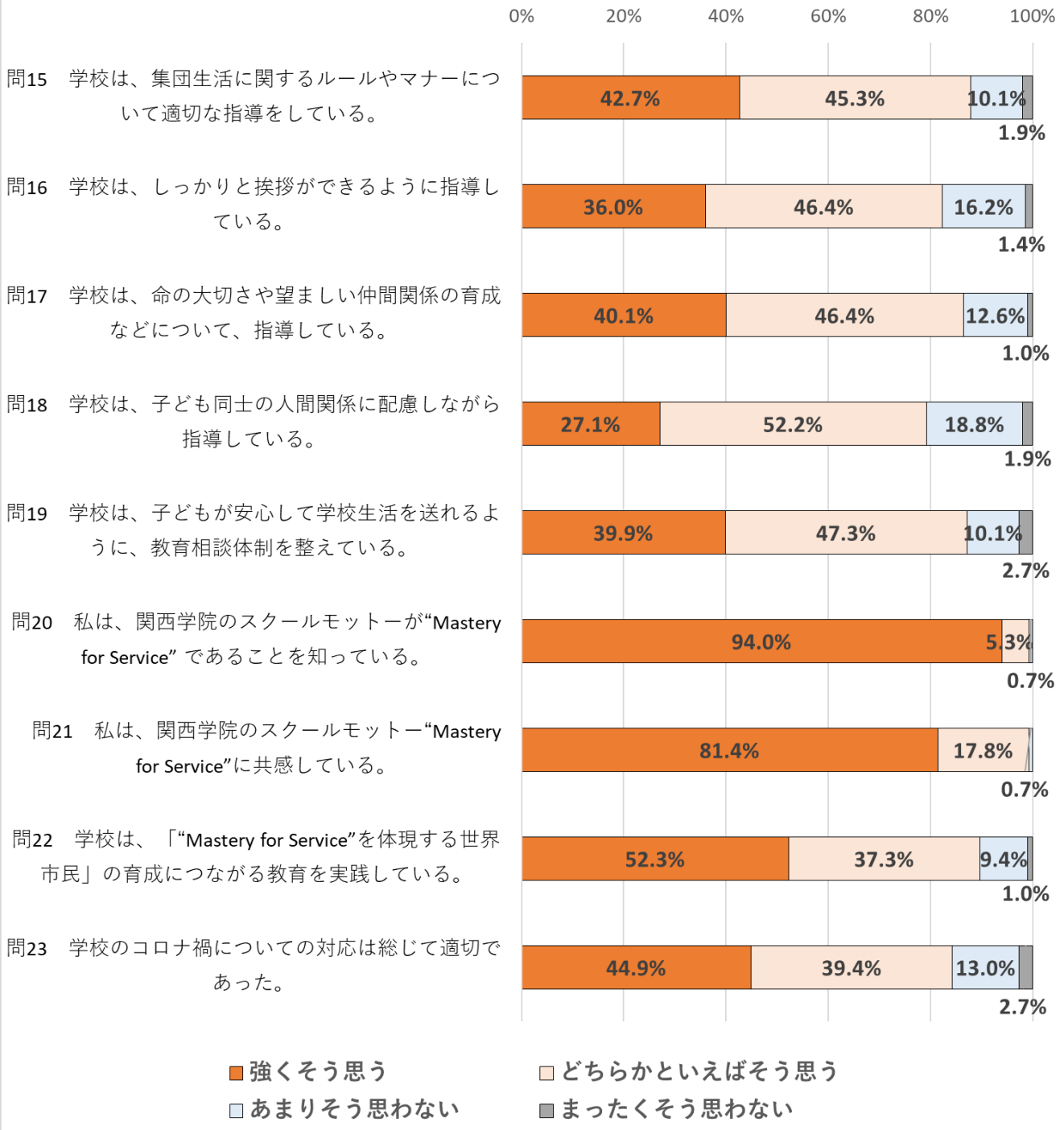
2020年度　学校評価アンケート集計結果
初等部・児童　（回収率　100％　362人/362人中）



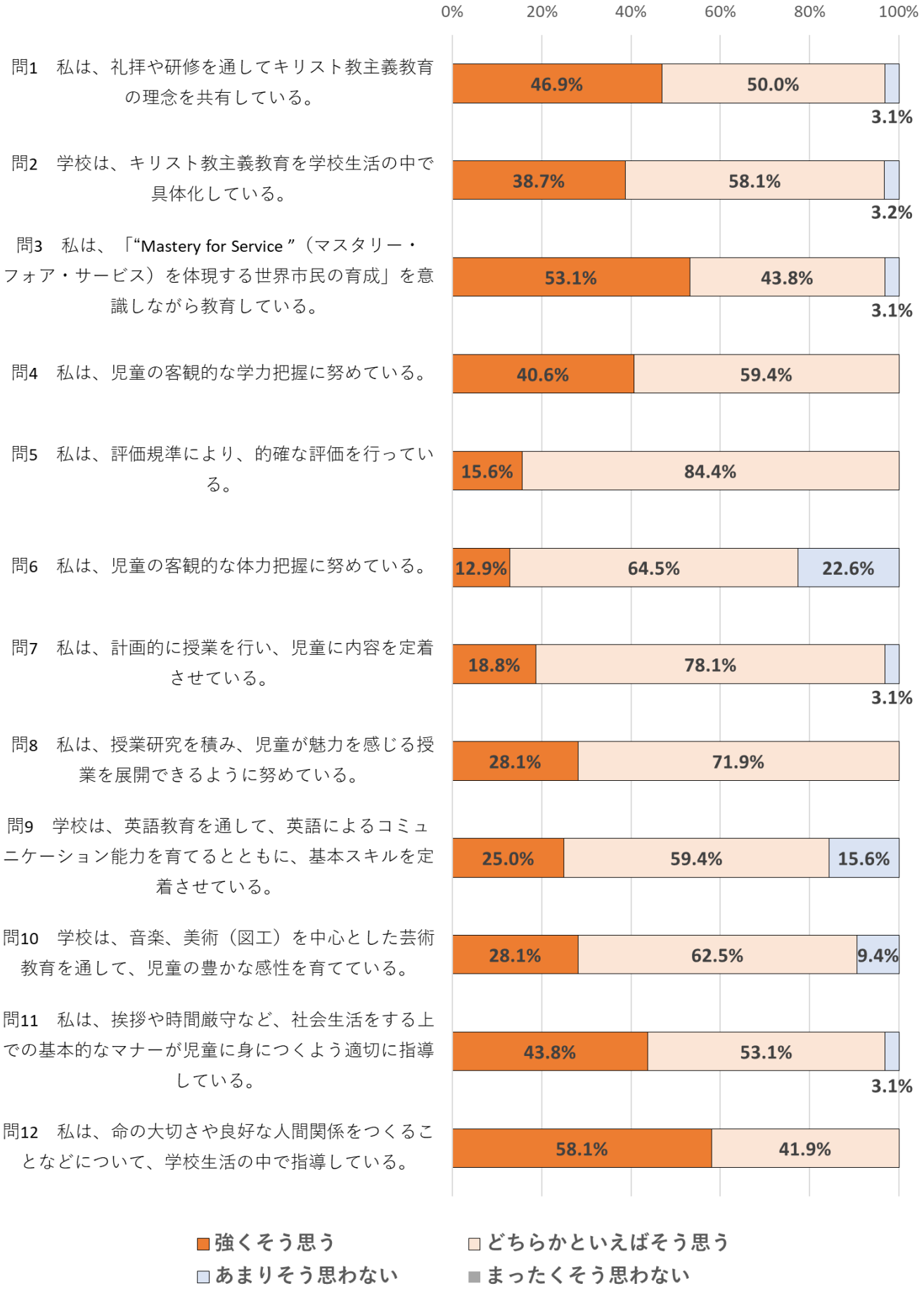
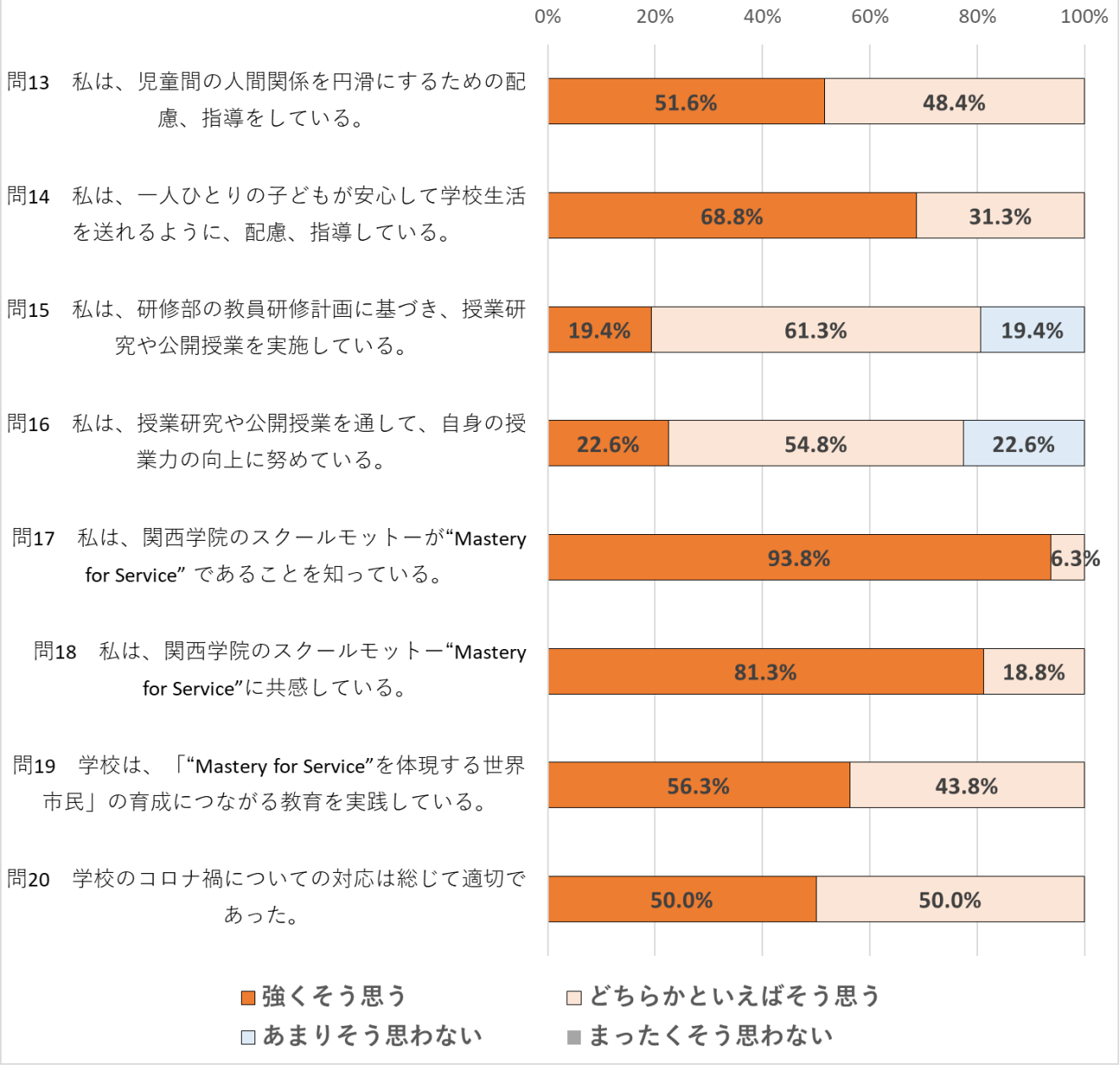
2020年度　学校評価アンケート集計結果
初等部・保護者　（回収率　77.3％　419人/542人中）



2020年度　学校評価アンケート集計結果
初等部・保護者　（回収率　77.3％　419人/542人中）



2020年度　学校評価アンケート集計結果
初等部・教員　（回収率　100％　32人/32人中）



2020年度　学校評価アンケート集計結果
初等部・教員　（回収率　100％　32人/32人中）